【憎き神との再会】

……。

…懐かしい空間…懐かしい記憶…。

…その場所は…あなたが現世で死に、この異世界へと転生される前、目覚めた異空間。

――また死んだ…のだろうか？

『そんなわけがないじゃろう！』

…懐かしい声…懐かしい風貌…。

その者は白い髭に白い髪、白いローブを羽織り、杖を持っている。

一言で言えば仙人。漫画に出てきそうな感じの老人だった。

当然見覚えがある。

なぜならその者は、あなたをこの世界で最弱で最悪の嫌われ者へと転生させた張本人だからだ。つまり、神様。と呼ばれる存在だ。

そして同時にあなたが憎むべき存在でもある…っ。

『なんじゃその顔はっ、まだ怒っておるのかっ？仕方ないじゃろうて！

あの時は以前ワシが転生させた者の視界と共有し情事に至る寸前だったのじゃから！

…あの者がの…？グフフ…助けた村人の娘とのぉ…♡分かるじゃろぉ？グフ、フ…♡』

その時の事を思い出すかのように、神は斜め上を見ながら目を細めイヤらしく笑う。

『じゃがなぁ…半ば強引でのぉ…。
助けられた手前、娘もその父も、何も言えんかったようでのぉ…。
可哀想に…ワシはレイプは好かんのじゃっ！
一流の冒険者がする事ではないのじゃ！
あの娘も泣いておったし…痛そうじゃったからの…。
…はぁ…やはり…可愛い女子の辛い涙はダメじゃの…。
まぁ、オカズにはしたんじゃがの？
…当然であろうっ⁉
あの可愛らしい小ぶりな胸と愛くるしいあの目！
まだ幼い体に三編みツインテール！最高じゃ！
右手を休められるわけが無かろう！』

――……。

『…ゴ、ゴホンっ…す、すまんすまん…。
話がおかしな方向に言ってしまっておるの。
…ふむ、そしてお主は気になっておるな？
共有とはどう言う事かと。仕方がない。教えてやろう。
お主をここに再び呼んだのにも関わることじゃしな。
…実はの？
ワシはワシが転生させた者の視界と、このワシの目を共有する事が可能なのじゃ！
もちろんお主とも繋がっておるぞ？
まぁ、毎日繋げておるわけではないがの。
最初覗いた時めちゃくちゃ嫌われておったからの。
あーこやつは女子と仲睦まじくイチャコラする関係にはなれんボンクラじゃなー。
と思っておったからの』

――そう言う事が叶わない人間に転生させたのはどこのどいつか。

『…じゃが！そう思っておったんじゃが！よくやったぞお主！』

何故か急に神様に褒められてしまったあなた。

それはこの世界に転生し、努力を重ねて強くなった事。

さらには最弱の盗賊職でありながら王国最強の冒険者へと上り詰めた事を。

『いやーお主がここまでやるとは思わなんだ。関心関心。じゃの。

過去ここまで偉業を成し遂げたのはお主以外誰もおらんし。

苦労したのぉ～…ぅぅ…』

――一体誰のせいで…。

他人事のように一方的に話し続け、一切の涙を流さず泣く神様に、あなたは呆れ返りため息をつくしかなかった。

『…して！ここからが本題なのじゃ！お主、気付いておるか？

周りの女達の反応を…！お主を見るあの魅惑的な眼差しを…！』

――何を言っているんだ？このジジィは…。

と、言いたい所ではあったが…そう、自身でも気付いていた。

当初、あなたを見る女性達のあの軽蔑するような視線。

以前は横を通るだけで嫌な顔をされ、距離を取られ、罵倒される日々…。

だがいつの日かそれが一切無くなっていた。

…無くなった所か逆に…敬愛の目を向ける者まで現れていた。

その中の一部の女性の目にはハートが浮かんでいるような気もした。

…それだけ…当初とは全く別の扱いなのだ。

『やはり気付いておったようじゃの。
そうじゃ、お主はもう嫌われ者の盗賊では無いのじゃよっ。
日々精進し、最弱から最強へと上り詰めたお主は…。
とんでもない魅力を持つ事になったのじゃっ』

――？

『意味が分からんという顔じゃの。うむ。
この世界では努力は報われる！のじゃ。』

――？？

『すまんすまん。簡単過ぎたの。
つまりの？努力して強くなればなるほど異性にモテまくる、という事じゃ。
この世界ではの？努力して強くなれば、それが魅力へと還元されるのじゃ。
強くなればなるほど、異性からの魅力は上がる。モテまくりの世界じゃ。
ほれ、勇者がモテまくりなのはそう言う理由じゃよ。
まぁあれは努力というよりは才能じゃがの…。
最初からモテまくりじゃ。パーティーも女しかおらんし』

勇者と聞き、嫌悪感を抱くあなた。
確かにかなりモテてはいた。
道行く女子、街娘、女冒険者でさえ、勇者に敬愛の眼差し…。
そして盗賊であるあなたの事を鼻で笑い…軽蔑していた…。

『じゃがお主は努力で魅力を培った。
努力での強さはの？才能での強さを上回る程の魅力を持つのじゃ。
とは言っても。どれだけ努力し強くなろうと、勇者の魅力には勝てんじゃろうのー…。
普通であれば』

そう言い、なぜか最後に決め顔であなたを見つめる神様。
――キモ。

『お主は普通では無かったっ、ただの冒険者でも無かったっ。
勇者とは正反対の…最弱で最悪の嫌われ者の盗賊！
そんなお主が…今や勇者よりも強い冒険者へとなったのじゃ！
この意味が分かるか？最弱が最強へと成長し、その力は勇者をも凌駕する程…。
そんな男の魅力…どうなっているかは想像が付かぬか？』

――言いたい事がなんとなく分かってきた…。

『そうじゃ！今のお主はどんな女性ともほぼ確実に！
寝床を共にする事が出来る程の魅力を持った男になのじゃ！
そう…例え勇者の恋人の…あの女剣士でさえものぉ…ぐふふ…じゅる…』

言いたい事は完全に理解したあなた。
街の女性達や女冒険者の態度の変わりようはこの世界特有の魅力が原因だったのだ。

――だからってなんでコイツが嬉しそうに…？
あ、視界を共有…そう言う事かっ…！このエロ神が！――

『あぁそうじゃ。それともう一つ言っておかねばならぬ事がある』

――まだあるのか…長いな…。

『今回の努力の賜物としてHスキルなるものを取得しておる！
そう言う意味でお主の役に立つであろうからの。後で確認しておくとよい』

――Hスキル？エロゲかよ。

『では話は終わりじゃ』

――やっとか…これでまた楽しい冒険者ライフを…。

『さぁ行くのじゃ！
王国最強の冒険者として！新たに…セックスライフを！
セックスでこの世界を救うのじゃぁーー!!
…グフフ…女剣士に猫耳に賢者に…エルフ♡
さらには王女や王妃までもお主の手によっていつか…ぐふ…ぐぬふふふ…♡』

――……どうやらこれからはセックスライフになるらしい…こんな奴の思い通りになんかっ…！
と、思ったが…まぁ悪くはないかな…うん……――

『…ニシシ…お主もやはり…男じゃのぉ～』
にたーっとイヤらしく笑いながら言う神。

――う…ムカつくが…こればかりは言い返せない…。
まぁ今まで散々嫌な目にあったんだ。
これからはハーレム冒険者性活…を堪能するのもいいかもしれない！
よし！まずはあのムカつく勇者の恋人達を寝取ってやろう！――

『うむ！その粋じゃ！ワシの為…ゴホン…。
自らの冒険者ライフの為！
存分に第二の冒険者セックスライフを楽しむがよい！
そして世界を救うのじゃぁーー!!』

――やっぱりムカつくなぁ…このエロ神…。

そして数日後…本編に続く♡